FRANCEラグビーの真の心臓部がここにある

～現代FRANCEラグビー発展の文化地理学的探究～

Le véritable cœur du rugby français est ici

日本ラグビー学会
第17回大会 一般発表　2024.03.23

ラグビー人類学研究談話会　主宰 山碕敦司 (神奈川県相模原市)

1 はじめに

■このたび、日本ラグビー学会総会において、小研究考察を発表できる機会を与えていただいたことにつき関係諸氏に 謹んで厚く御礼を申しあげたい。

FFR, ボルドー大学などの画像資料による

■我々 日本ラグビー学会の使命とは何か。

1) **ラグビーの歴史を継承し、ラグビーとその周辺の事象について科学的に徹底究明すること。**

2) **ラグビーを国民にさらに普及し、その成果を最大限に活用すること。**

3) **世界に向かって新たなラグビー価値を創造し、進化させ一層輝かせること。**

その使命とは、これら三点である (日本ラグビー学会HP参照。一部補助加筆)。

■我々には今後本学会活動を通じて影響力あるメッセージを発信し続け、「発想力」「創造力」「構想力」「探求洞察力」そして「実践力」を兼ね備えたRUGBY MANを男女を問わず創り出し、すぐれたリーダーたちを我が国内はもとより、**世界に向けて送り出し続けるべき務めがある。**

■世界のラグビー唯一の国際統括組織**「WORLD RUGBY」**は2023年５月に代表チームの成績や普及の度合い、協会の財政力など具体的な基準を設けてそれぞれの国や地域のチーム (112か国)を5段階の階層グループに分ける方針を示した (*1。

■その最上層群は「ハイパフォーマンスユニオン」と呼ばれる。所属国はイングランド、アイルランド、スコットランド、ウェールズ、FRANCE、イタリアの欧州 6か国と、ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、アルゼンチンの南半球 4か国の合わせて10チームで構成される。しかしここで、今回これらに加えて**新たに日本が選定され、計11か国となったのである**（*1。

WORLD RUGBY

World Rugby などの画像資料による

■すなわち数あるラグビー強豪国の中で、日本が Tier One改め**【ハイパフォーマンスユニオン】(第1層群)**としてWORLD RUGBY(世界連盟)に迎えられたのである (*1。　これほど名誉でこれほど光栄にして恐るべき事件は日本ラグビー史上ではかつてなかった。この誉れ高く圧迫感の強い「新たな称号」は我々に何をもたらすのか。それは今後日本が世界に範を示し、力強さを示し、また我がラグビー青少年の育成・成長ぶりを誇示すべき使命を果たせねばならないこと、そしてそのエネルギーとEsprit(精神力)の使命源・規範となり道しるべとなるべき貴重なチャンスを受け取ったのだ、という２点である。これによって今後の日本のラグビーの命運が決定づけられた。我々はその責務と共に前進を続けねばならず後戻りはできない。**ここで我々は世界ラグビーの変化と進歩に臨み、これを絶好の機会として近い将来確実に名誉ある地位を占めたいと強く望んでいる。**

■今回の日本ラグビー学会総会テーマとして**「ラグビー競技の学校教育における課題と展望」との命題が与えられている。**これこそ我々「次世代ハイパフォーマンスユニオン国」日本が**誠実にして緊要な応答を示さねばならない必須テーマであり、今後の高難度の使命と責務に反応するために、まず最初に手掛けねばならない不可避なる課題のひとつである。**

2 FRANCEラグビーの真の心臓部がここにある

■さて今回「ハイパフォーマンスユニオン」の称号をいただいたことに際し、我々が興味と敬意をもって世界列強と認められる様々な国々を顧みるとき、長い年月にわたり独自の強い存在感を示しながらも英語圏諸国と独り真正面から向かいあってきた国がある。それが **FRANCE** である。

■FRANCE共和国のラグビー (15人制)は、多くのラグビー実践国の中にあって常に上位ランキングを確保・維持してきた。FRANCE代表チームは過去開催された10回のワールドカップにおいて6回の入賞を果たし、これを頂点として数々の国際大会やテストマッチを制してきた。

2024年3月16日現在 欧州男子六か国対抗戦が終了したが 男子は同112か国中 4位、そして女子が世界64か国中3位にランクされている (日本は12位) (*8。 驚くべきは南アフリカ・ニュージーランド・オーストラリアさらにはアルゼンチンの南半球 4強国すべてから10勝以上を挙げた北半球の国はこのFRANCEのみなのである (*4。

いま、このFRANCEという国に我々はパワーと将来性を強く感じる。

同時にFRANCEは、焦点を絞り確実に研究すべき対象なのだと言える。

■欧州各国の中でもFRANCEにおけるラグビーの国際競技力の獲得・養成、また国家市民全体を挙げての教育・地方クラブでの情熱的展開・普及・活用、加えてプロリーグの取り組みと活況については特筆すべきであり、とりわけ強くひきつけられる。興味深いラグビーオーラを放つ「FRANCE」・・今後も世界のラグビーシーンで確実に実力と成績を増してくるはずである。

今回は通常顧みられることの少なかった「もうひとつのラグビー王国」FRANCEに焦点を絞る。

■**『文化』とは 人類の思考・行動・生活様式と、その有形・無形のすべての産物である** (*3。

■**FRANCEラグビーの歴史と現状について観察するとき、まず驚かされるのは FRANCE国家・政府そのものがラグビーを【国民スポーツ文化のひとつ】と認識し、さらに【地域生活において豊かな文化機能を維持・活性化し、その魅力を提供する国民の文化】であると自認し、その普及と繁栄を支援している**点である (*2。

FRANCE
ラグビー連盟
ロゴマーク

FRANCE
プロリーグ協会
ロゴマーク

同時にFRANCEではラグビーの教育価値を重視し、教育現場においても重点を置いてラグビーの普及推進活動が幅広く盛んに展開されている。(*5,6,7

■**その決定的な証拠として、FRANCE外務省 (Le ministère de l'Europe et des Affaires étrangères) のHP最新版トップページにおいて現在、国立スポーツ博物館 (在ニース) のラグビー展示資料が堂々と上梓されている**ことが一番に挙げられる。（ *2 。

しかし現在、このようなラグビーの国家と地域は他には見当たらない。

■同 資料冒頭にいわく**【ラグビーは現代のチームスポーツではあるが、これを実践する多くの人々にとって、ラグビーはそれ以上のものである。情熱、自己実現と自己証明の様式、宗教、ライフスタイルなのだ】**と (* 2。

FRANCEでは国家自体がラグビーを、もはや単なるスポーツとしては見ていない。彼らにとってラグビーとは市民の人生・生活理念や生きる目的や生きざまにまで深く立ち入って息づく生活文化であり、信頼され希望とパワーに満ちた《熱い地域文化》として浸透し定着している。つまり、**FRANCEにおいてラグビーとは【感動の生活文化 =国技】自体の一部なのだと見ることができる。**

Liberté • Égalité • Fraternité
RÉPUBLIQUE FRANÇAISE

MINISTÈRE
DE L'EUROPE ET DES
AFFAIRES ÉTRANGÈRES

FRANCE共和国
外務省ロゴマーク

FRANCE国立スポーツ版物館・
ラグビー展示　2023年

■特筆すべきは 同国にラグビーが文化として伝播・確立されて以来、約130年間 (*25、**南西部の特定の地域圏 Occitanie が軸となってFRANCEを燃え立たせ、特異な「ちから」を発揮させ輝やかせてきたことである。**今回はこのOccitanie地域圏に光を当て、ラグビー自体が持つ優位点も含め、その発展に貢献してきたラグビーの文化価値の抽出を試みた。

■このFRANCE地域圏**Occitanie**へのアプローチの道筋を活用し同地がアマチュアとプロを問わず**自らFRANCEナンバーワンの「ラグビーのふるさと」を主張してやまない理由と原因、**それを未来の青少年につなぎ、託そうと燃える教育活用に向けた真剣なEsprit(エスプリ:理念)さらには同地のすべての**家族がラグビーを熱愛・応援し、積極的に関わり続けようとする熱い風土について、今までにない新鮮なショックを浴びながら異なる角度と視点から観察と考察を行いたい。**これにより、我々が経てきたラグビーに対する哲学を再構築し新鮮なる使命を悟り、日本各地のコミュニティの姿勢や熱いファンに包まれたラグビー風土の育成とその強化・隆盛を進める要件を敢えて抽出+内省することにより、我々自身がラグビーの将来に希望を持ち続けたいと願う。

■我々が外国のラグビーを見て学び取ろうとするとき、特にFRANCEのラグビーが独特の雰囲気と強いオーラを放ち、風土、プレースタイルが他国と一味異なっていることに改めて気づかされる。そこに着目し、実質を探求すればFRANCEラグビーの心臓部・根幹部とも呼ぶべき、とある真実の場所に行き着くことができる。 **その真実の場所とは　南西FRANCEの一角の地域行政圏域 = Occitanie (オクシタニ地域圏) であり、それを構成する小さな街々である。**この地に焦点を絞り独特の文化地理的背景を踏まえてFRANCEラグビーの熱く強力な力量と品質に迫りたい。

Occitanie (オクシタニ) ⇒FRANCEラグビーの真の心臓部がここにある。

オクシタニ地域圏のロゴマーク

FRANCE　オクシタニ観光局　資料等より

3 FRANCE南西部「Occitanie〈オクシタニ〉 地域圏」の謎

Occitanieとは何か = 2016年 仏政府指定の南西部オック語使用特定地域

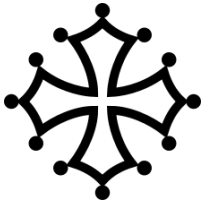
日常生活においてオック語(欧州南部に広がるロマンス語方言の一つ)をFRANCE語と共に用いることが多い ラングドック・ルシヨン Langue d'oc lusion 州が (*10　同じくオック語を用いるミディ・ピレネーMidi-Pyrenees 州とともに 2016年にFRANCE政府の指定により合併されてできた地域行政圏域である。・・・これを**Occitanie (オクシタニ)地域圏**と呼ぶ 。
Occitanieの面積は72,724 ㎢ (日本の東北地方全体の約 1.08倍)、人口は約593万人である (*11。日本では京都府と愛知県が提携自治体である 。

Occitanie周辺の ロマンス系方言の分布

FRANCE本土全体図と Occitanie

Occitanie 全体図

Occitanieと絡み合う3つの文化地理的要素

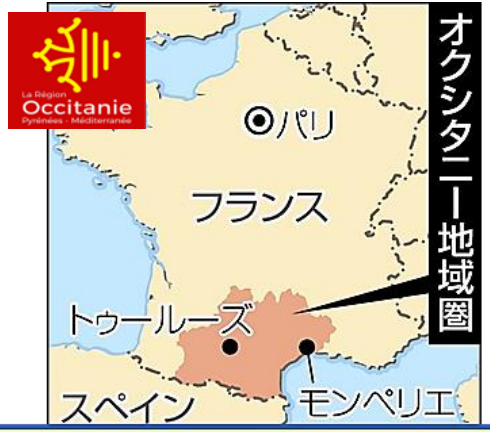


カタリ派結束の象徴となった
オクシタニア十字

Occitanieの謎はまず**地理的複雑性**にある。国内第二の面積を誇る広さの圏域(日本の東北地方全体の約1.08倍) 内に西北部には**山岳地帯** (3000m級が続くピレネー山脈の一部) を擁し、南端では**地中海**に面するという多様性が特徴である。比較的温暖な気候で、農産物も豊かである。ラグビーが英国人たちによってもたらされる1800年末よりはるか以前の1200年頃、ここOccitanieには当時のカトリック教会からは異端とされていた「カタリ派」というキリスト教的な信教が広く浸透していた。**カタリ派**はこの土地独特の大らかで自由な思想風土を素地としており、質素を旨とし禁欲的であった。またローマカトリック教会に対する反骨精神のような信念も強かったため、これに反してカトリック側の教会十字軍というものが組まれ、その大弾圧と攻撃が続いて全市民が虐殺を受けた都市も出た。今では当時の弾圧によりカタリ派の記録もほとんど残っておらず**その全容は謎のまま**である。「Occitanie地域圏」の語源となった**Oc(オック)語**も話者が減ってしまっているが、時代が移っても地域圏の首府として繁栄を続ける大都市Toulouse(トゥールーズ)を中心にオック語の再普及の試みが続いている。例えば、オック語版のラグビーパンフレットも完成を見ている (*13　。

4 Occitanie地域圏 のラグビー活動と生活文化

■Occitanieには**7 万人以上の登録選手**（FRANCE全体では 32万8,000人―2018 年統計）が約 400 のクラブに分かれて所属・活動している。OccitanieはFRANCEでは15人制ラグビーの1番手の地方リーグである。また、Occitanieでは毎年25,000万人以上の少年・少女選手が、同地域に約300カ所以上ある ラグビースクールのどこかでラグビーを始めている (*14 。



東京新聞記事資料より転載

■現在(2022) Occitanie 地域圏の総人口は593万人であるから、その約**1.2%に当たる人口がラグビーの登録選手**である。日本の関東地方を実例に取れば 地方総人口が4,353万人(2024) =登録選手数が約3万人(2022年:日本協会)= **約0.07%に過ぎない。**Occitanieは全仏で最もスポーツ人口の多い地域であり全住民の77.6%が何らかのスポーツを楽しんでいる。ラグビーはその中でも、サッカー、テニスに次いで第３位を占めている (*14 。

Occitanie のラグビーはスポーツ以上に大きな意味を持つ…。

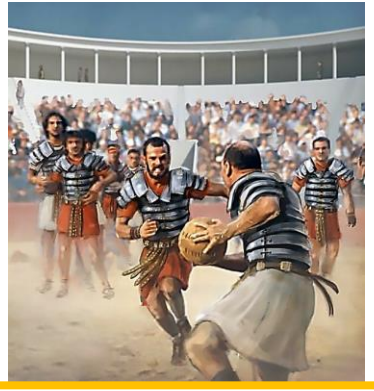
Occitanie地域圏 知事　キャロル・デルガ 女史は世界に向けて発信した2023 FRANCEワールドカップの同地域圏観光局の記者発表資料で【**オクシタニにおけるラグビーは、スポーツ以上に大きな意味を持ちます。それは100 年以上にわたって村や町を価値観や歓喜で潤してきた、地方文化そのものです。**ラグビーの情熱は食文化からライフスタイルまで、寛容のエスプリからおもてなしの心まで、お祭り、分かち合いなどの感覚に至るまで、**オクシタニーのあらゆる所に浸透しています**。才能豊かなラガーマンを数多く擁し、世界に名を轟かせるプロクラブも多い我がオクシタニー地方は受け入れ体制をしっかり整えています。世界最高峰の選手たちのプレーを目の当たりにすることができる絶好の機会となることでしょう。さあ、ラグビー天国オクシタニーへようこそ! 】と述べた (*14。

月刊誌 “Histoires (イストワール)”で **Jean Lacture (ジャン・ラクチュール氏=ジャーナリスト)は論文**『Rugby : du combat celte au jeu occitan』を寄稿した【・・ しかし、**FRANCEのラグビーの精神、風味、特殊性は、その南部主義ラングドック(Occitanie)にこそあり、**軽快なアクセントそして闘牛「ラゼット」と結びついています。】(*15

5「Occitanie RUGBY」の実力とは

Occitanie には「原ラグビー」があった

原ラグビーとしての**Harpatum, Soule**などを受容し育んできた風土がOccitanieには存在した。



ギリシア発祥の過酷な格闘的なローマ時代の競技「ハルパットゥム」: Amino誌より転載

ラテン語では今でもラグビーを『**Harpatum**』と呼ぶ。この『**ハルパットゥム**』はローマ時代の極めて過酷な闘争競技で、主として軍隊同士または隣町同士が戦い、時には死者も出るほどであった。この競技はローマ時代から発達し、同じく広がっていた**Oc(オック)語の地域がそのまま Harpatum の普及地域となった。また英国から近距離にあった対岸のブルターニュ地方からは1100年代に入って英国伝播の『Soule(スール)』が伝わった。**

ブルターニュ発の格闘的な競技 Soule : WikipediA より転載

地元Occitanie で生き抜いてきた人々の生活風土の中にラグビー発展の素地・素質は存在したと言える。

それがOccitanieのラグビー文化受容と発展の基盤ともなり得たことは否定できない (*21, 22。

また、**Occitanieの多くの街には「闘牛場」が今も数多く残り**「熱狂的な民衆」がそれを支持している。

FRANCEのトップラグビーを育て上げ、支えてきたクラブ組織とは何か

FRANCEのラグビーは、2005~2006年シーズン時に大変革を起こした。地元クラブのプロ部門を支援するスポンサー(応援企業)も、それまでの規模と計画性において格段に違ってきた。そのとき、現在の**トップリーグ「TOP 14」**(14チーム)、**二部リーグ「D 2」**(16チーム) の仕組みが決定した。・・それ以下のリーグ構造は次年度以降に逐次整備されていった (*23 。

ラグビーFRANCE選手権の覇者クラブはどの土地に集中しているのか

★**FRANCE選手権**は1892年に開始。以来**2015年までの決勝戦123試合中、Occitanieのクラブが優勝したのは 計61試合で全試合の49.6%にのぼる。**

★なかでも**同選手権で優勝したベストクラブ20チーム中 Occitanieの8クラブがこれを占める。**

★特筆すべきは **Stade Toulousan (22回優勝)、AS Beziers (14回優勝)、FC Lourdes (8回優勝) など、圧巻の強さ**を誇示してきた (*24 。

なお、現在までしばらくD2に甘んじていたBezierは3月中にTOP 14 に昇格復帰の見込みとなっている。

TOP 14 のロゴ

D 2 のロゴ

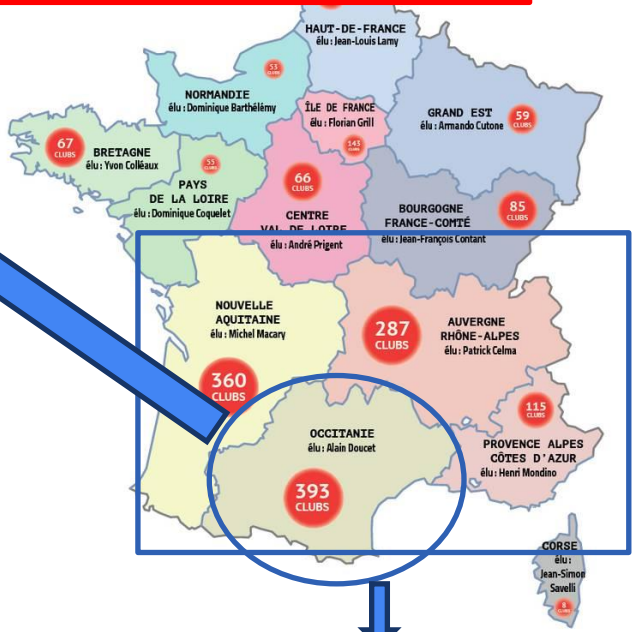
Occitanieラグビーの「強さ」の秘密

熱狂する首府Toulouseの市民

東京新聞記事資料より転載

首府Toulouseの市民なら、誰でも 大切なリーグ戦後の酒宴を「第3ハーフタイム」と呼ぶ！ (* 14など

Wikipedia FR.資料図:
2008~2013のプロトップ14クラブ分布
※赤い線より南がOc語使用地域



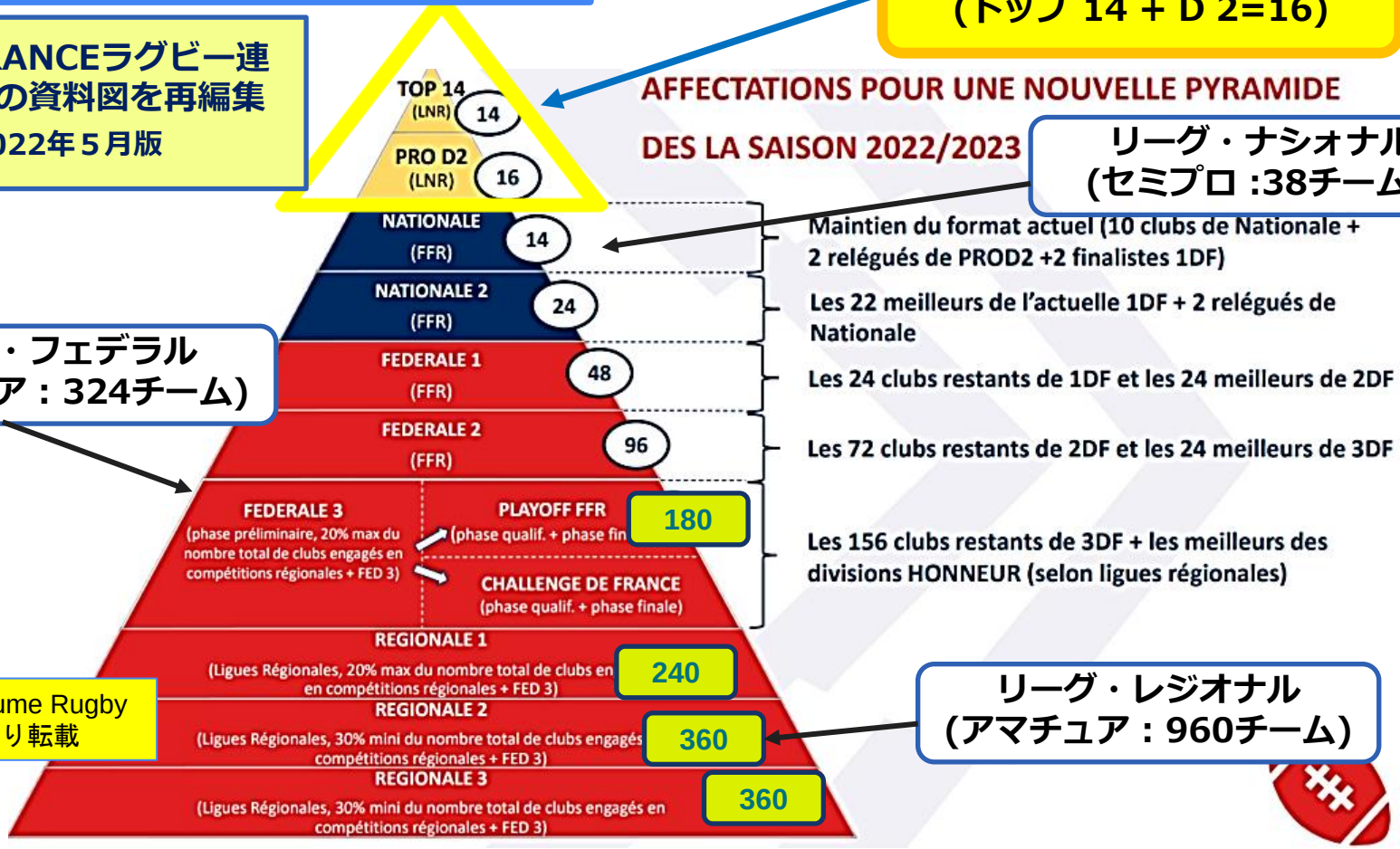
Occitanie(青円枠内)の
アマチュアラグビークラブ登録数 2022 = FFR資料図:

現代FRANCEラグビー(アマ+プロ)のピラミッドの仕組み

FFR (FRANCEラグビー連盟) などの資料図を再編集

2022年５月版

トッププロクラブ: 30チーム
(トップ 14 + D 2=16)



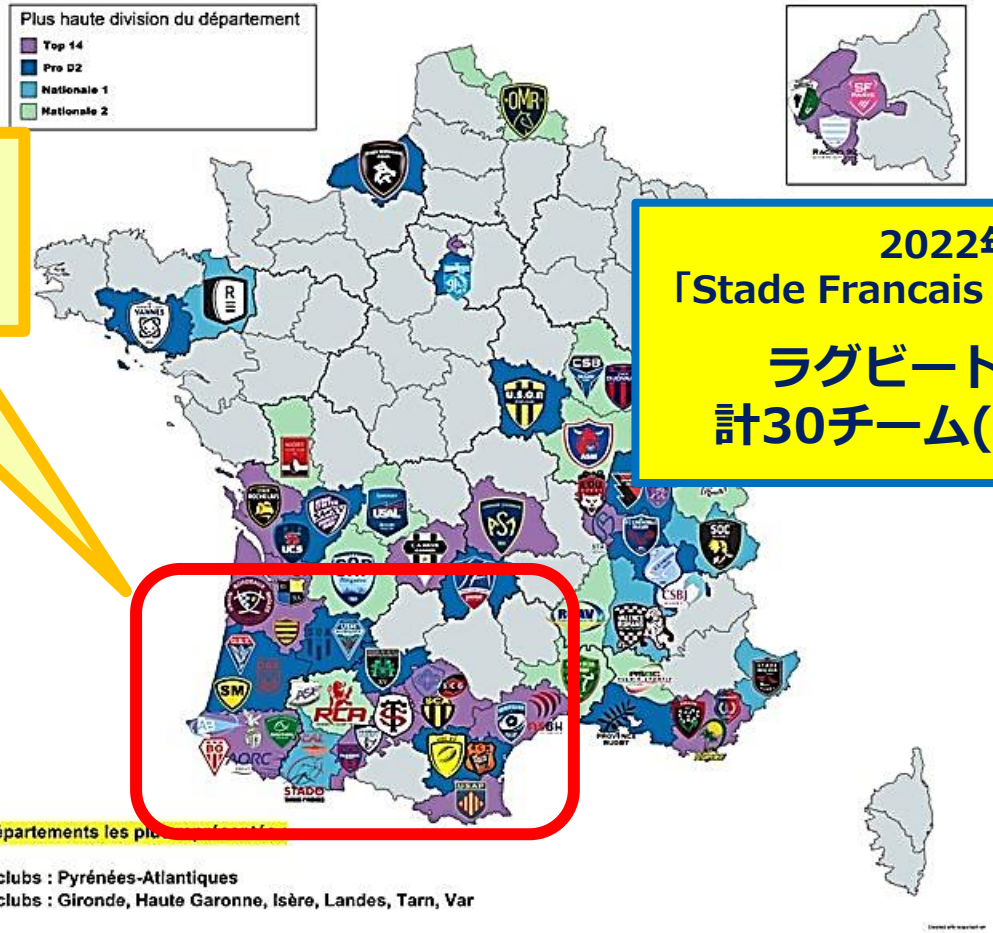
リーグ・ナショナル
(セミプロ :38チーム)

リーグ・フェデラル
(アマチュア：324チーム)

リーグ・レジオナル
(アマチュア：960チーム)

CS Puy-Guillaume Rugby
HP2024などより転載

Les 68 clubs des divisions pro/semi-pro de 2022/2023



Occitanie 地域圏内のプロチーム所在地
(赤枠内:2022年時点)

2022年7月時点での
「Stade Francais 」(本拠地 = パリ) によるまとめ

ラグビートッププロクラブ
計30チーム(14+16) 分布状況

■FRANCEワールドカップ開催当時のFFR会長は誰で、どこの出身か

Bernard Laporte(ﾍﾞﾙﾅｰﾙ･ﾗﾎﾟﾙﾄｩ) 60歳。2016より2023(開催年)までFFR会長。
Occitanie のRodez 生まれ。近隣のOc語地域にあるBordeaux-Bègles の元選手(SH) (*25。

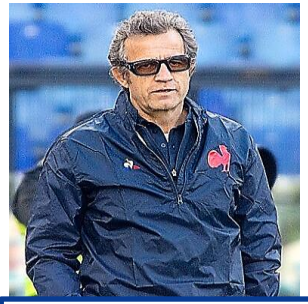
■FRANCE代表チームの監督は現在誰で、出身クラブはどこか

Fabian Galthie(ﾌｧﾋﾞｱﾝ･ｶﾞﾙﾁｴ)55歳。2020より代表のHCを務める。
OccitanieのCahorsに生まれる。 同副首府 Montpellier Héraultの元選手(SH) (*25。

■2024年6か国対抗ラグビー代表選手33名の出身クラブはどこか

本年2024年FRANCE代表は6か国中2位。33名中12名(36.4%)をOccitanie選手が独占(*25。

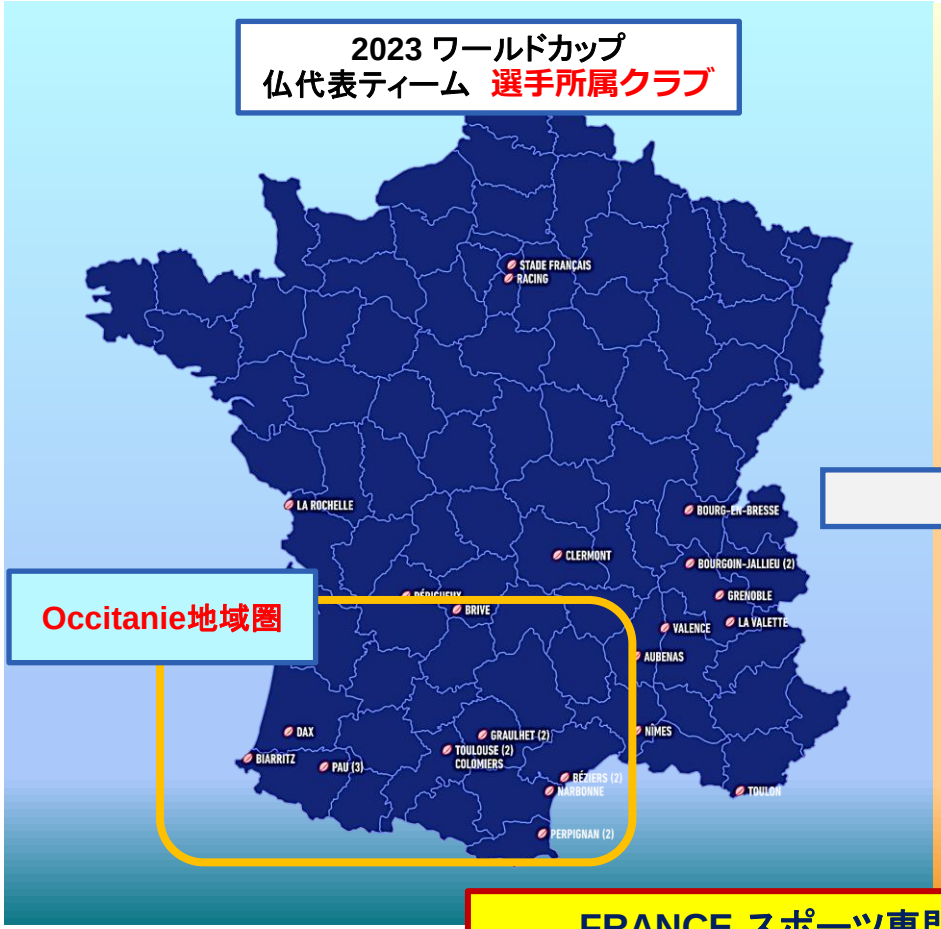
オクシタニ地域圏のマーク

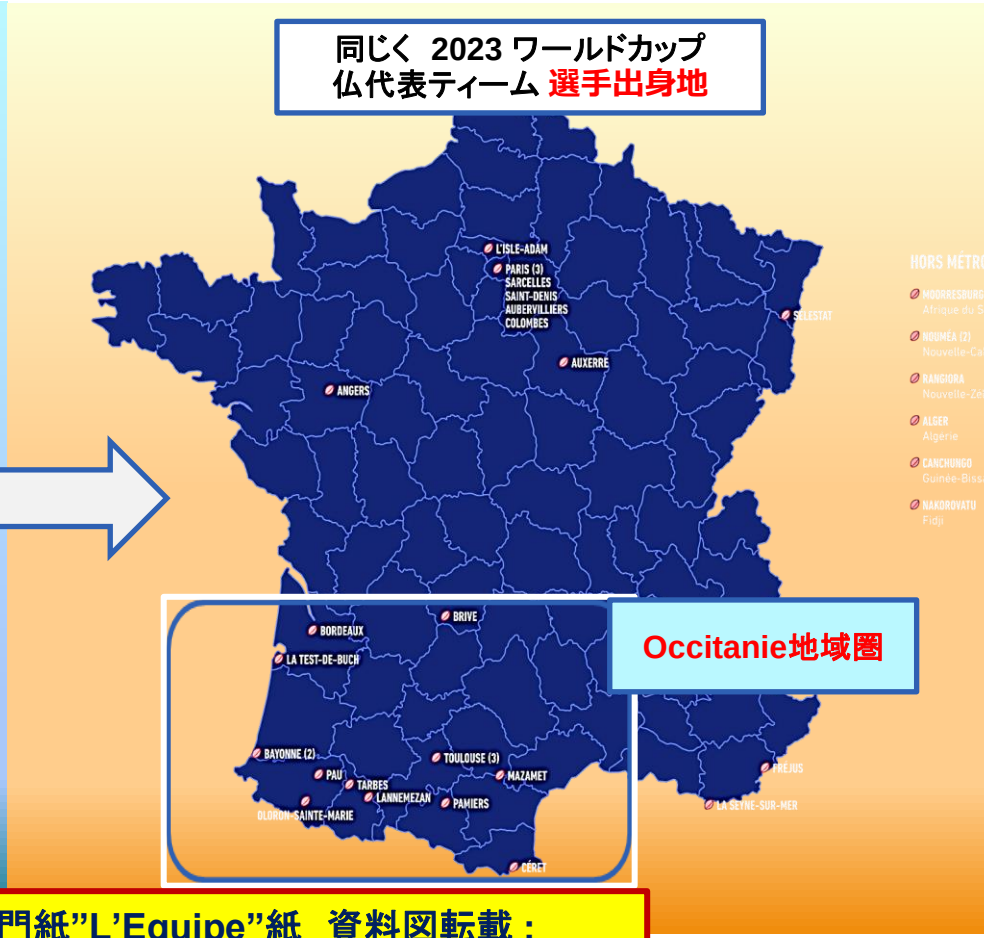


Fabian Galthie
2020~ 15人制代表 HC

Antoine Dupon
ワールドラグビー
年間最優秀選手2021

Bernard Laporte
前 FFR仏ラグビー連盟会長
2016~2023





FRANCE スポーツ専門紙”L'Equipe”紙 資料図転載：
2023年時点の「プロトップ14」クラブと選手出身地の分布 (*26

6　地域に深く根付きFRANCEを変えてきたラグビー文化

～FRANCE Occitanie のラグビーの文化地理～

1) Occitani ラグビーの底力 a =
仏ラグビーの発展を支え続けるマルチメディア

南西FRANCEのラグビーの栄光を軸に
編集発行=「ミディオランピック」誌

① **«Midi Olympique » (ミディ・オランピック)**
= 地元ラグビー専門週刊誌(隔週発行:書店・kioskで販売)
(1929年9月創刊 、現在の発行部数 88,000部、
本社 Toulouse =Occitanie首府、支社はパリ】(*27

② **«Rugbyrama» (リュグビラマ)= Midi Olympique誌のWEBサイト+電子版アプリ**
(各種スマートフォン適合 、現在登録者数 58万人、リンクフォローワー約300万人
本社 Toulouse =Occitanie首府) (*27

③ TV局&放送/配信
«Canal+»（カナルプリュス）　・仏TV 有料放送最大手、Netflixとも提携
«France 3» (FRANCE・トロワ)・仏国内地上波TV局、地方コンテンツが軸
«Eurosport»(ウーロスポール)　・米ワーナー系TV、スポーツ専門マルチメディア局

2) Occitanie ラグビー文化の底力 b =

ラグビーの繁栄を祈念し、選手たちの魂を讃え、亡き名選手をも惜しむ。
そして祈り続ける愛情深き「ノートルダム教会」(カトリック教会)

“Chapelle Notre-Dame-du-Rugby” （シャペル・ノートルダム・デュ・リュグビ ）その名を知るのは、Occitanieと南西FRANCEのラグビー関係者、そして全世界からのラグビー信奉・愛好者たちだけである。それはOccitanie の西隣、スペイン国境に近い「Oc語言語文化の西端」と呼べる Lande(ランド)県にある。教会そのものは、5世紀ごろから存在していた塚の上に13世紀に建てられた。当地の神父 Devert (デヴェール) 氏が1963年に交通事故に遭った3名の優れたラグビー選手を翌年より手厚く追悼し、かつ現役の選手たちを激励するために改装された。教会内部には180着以上の各国・各チームのラグビージャージが集められ整然と飾られている。毎年世界各国から15,000人以上の訪問客がある (*18 。

Chapelle内部とラグビーのステンドグラス
: WikipediA FRANCE　などより転載

3) Occitanie ラグビー文化の底力 c =

かつてFRANCE代表として世界を駆け巡った 不世出の名フランカー・・
ラグビー芸術家への転身と迫力の作品の数々、そして世紀の「名言」

FRANCE代表選手として何度もチャンピオンに輝いた、トゥールーズ出身のジャン＝ピエール・リーヴ（Jean-Pierre RIVES）はモニュメント彫刻を制作しているが、その作品のひとつは、自身がオーナーで夏の間だけOccitanieの首府トゥールーズでオープンするレストラン“ラ・サントラル”（la Centrale）に展示されている。(*28

また彼の世紀の名言がある。いわく**« Le rugby permet aux enfants de devenir adultes et aux adultes de rester des enfants »** (*29

『ラグビーは、子どもたちを大人にし、大人を子どものままでいさせてくれる。』

「Casque d’Or」(黄金ヘルメット)と呼ばれていた
現役選手時代…そして現在の近影と作品類
: WikipediA FR. などより転載

4) Occitanie ラグビー文化の底力 d =

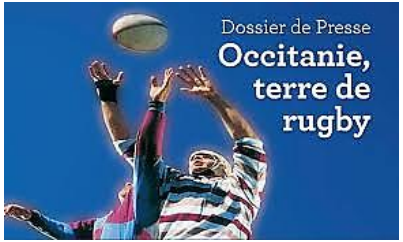
近代フットボール史上初めてボールを抱えて走ってしまった“Willam Web Ellis”氏 。彼が自らの人生を終えて永眠した郷とは‥

イタリア国境に使いFRANCEの南東部に、地中海を望む マントンという町がある(南仏ニースより東へ21km：Occitanieからはやや東方に外れるが、いまだにOc語話者も多い地方)。海辺から坂道を上った小高い丘の「ヴュー・シャトー墓地」に ラグビーの「発明者」とされるウィリアム・ウェブ・エリスは眠る。彼は「牧師」として晩年を過ごした後、南仏にて病気療養中に逝去。**墓地の門の脇にはボールを持って走る男の子の像があり石碑に「ウィリアム・ウェブ・エリス、ラグビーの発明者」と刻まれている。** (註:当時の英国では各パブリックスクール独自に異種なフットボールを実施。エリスの行動はその中での出来事。サッカーの試合中のことではなかった) 。
英国人エリート階層出身だった彼自身も人生の終着駅として南仏を選んだのである。エリスの墓地には、いまも世界各国からの墓参者が絶えることがない (*17 。

エリス氏は牧師として説教を続けた後、南仏にて逝去
：時事通信社記事、WikipediA FRANCE より転載

5) Occitanie ラグビーの底力 e = すべての市民のためのラグビー

その次に来るのは・・今回のOccitanie調査で見ることができた「全民型ラグビー」がある。町や村の全民が毎年、シーズンになるとプロラグビー観戦に沸き立つだけがOccitanieのラグビー文化ではない。**【ファミリー5人制ラグビー】【チビッ子ラグビー】【女性ラグビー】【車椅子ラグビー】【ビーチ(砂浜)ラグビー】【ウォーター(浮台またはプール)ラグビー】**等々、やってみようと思い立てば、**いつでも・だれでも参加できる「親しむべきラグビー」**がプロの試合日や祝日祭・記念祭のイベントなどで広く設定され開放され実践されている(*14。そのような環境づくりが時節ごとに各地で行われ、生活に根付いた「お祭り」として市民を楽しく巻き込んでゆく。同時に全市民に対する「スポーツ参加・スポーツ実践」への壮大な「いざない」が続いてゆく。



7 FRANCE “EDR” : Ecoles de Rugbyとは何か
~FRANCEのラグビーの教育活用~

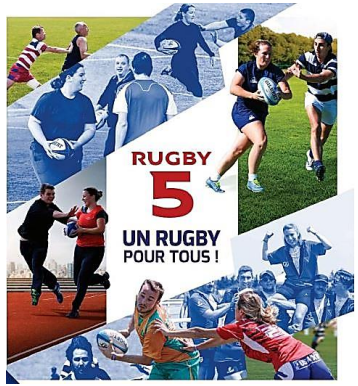
■本来、ラグビーの特性は子どもたちに対して たくましい **「心身能力」「忍耐力」は無論「社会生活力」（=社会性）「人間総合力」「問題解決能力」さらに「目的集約性（団結力）」「協調性」「勇気と友情」「尊敬力」「規律」「安全管理力」、そして「規律」と「感情のコントロール力」を与える**ことができ、育て続けることができる (* 6 。ラグビーとは すなわち**【人格陶冶価値】また 【教育的価値】の極めて高いスポーツ**であり、**子ども育成文化資産**とも呼べる。

FFR(Federation Francaise de Rugby:1919年設立 :FRANCEラグビー連盟(ｴﾌｴﾌｴｰﾙ):13人制を除くラグビー教育とアマチュア活動、およびすべての種類の国家代表チームの訓練と派遣を統括する全国統一連盟)は、教育価値を浸透しその活動を活性化させるため、左図表紙のような**「ラグビースクール冊子」を2020年9月に全国のクラブに向けて発行した** 。これは、国家教育省、国家スポーツ省の認可に基づいている。このテキストはまた USEP (公立学校初等教育スポーツ連合) の支援も得ているプログラムである (* 5 ,20 。

■このFFRテキストの発行に際して当時のFFR会長であり、Occitanie出身者である Bernard Laporte (ベルナール・ラポルトゥ) 氏は『ラグビーは子どもたちを団結させる、すぐれた教育ツールであり、子どもたちの**発達のためのベクトル**(方向性と力量)である』と述べた（*5 。

■また、同テキスト冒頭において、FFR国家テクニカルディレクターのDidier Retiere (ディディエ・ルチエール) 氏は『Ecole de rugby, ecole de la vie』(ラグビースクールは人生の学校である) とのスローガンを掲げて『70年代にできた言葉の中でこれほどラグビーについて的を得たスローガンはなかった。**我々は国から託された公共奉仕の使命を尊重するためこのスポーツの教えをできるだけ多くの人々と共有したいと考えている。** そして将来の世代の教育に責任を負うすべての人がこのをスクールを利用できるようにする以上に合理的なことがあるだろうか?』とも述べている（*5 。

■**教育活動におけるラグビーの醍醐味とは何か。**



「初めてだがおもしろそうだという**好奇心**」「兄弟・友達・家族もやっているし、だれでもできているんだという**親近感**」**「こわくないしあぶなくもなく、難しくないぞという安心感」**「こんな自分にもチャンスがいっぱいあるかもしれないという**挑戦欲**」「こう攻めればもっとうまくいくんじゃないかという**戦術的好奇心**」「我々ならきっとうまく闘えるという**同志感覚・チーム感覚**」このようなラグビーのエッセンスを与えてみて、やらせてみながらこれらの好奇心を子どもたちや学生たちから引き出せれば上出来である (*19 。

■FRANCEの**「EDR : Ecole de Rugby」(ラグビースクール)**はそこに重点を置く、全国統一規格の総合指導ノウハウである。(*7,20　かつてFRANCEのラグビー実践においては、指導者・保護者・選手の三者がともに「ラグビーは苛烈にして勇敢な男子的闘いなのだ」という固着した観念を強く持ってきた(現在もいまだに変わらない日本の思想と似ていた) 。そのことが足かせになってFRANCEでも当時人気を獲得して盛んになってきていた15人制のプロラグビーが、スポーツとしてのまた学校教育のための進歩・進化に必要な《許しと包容力》をなかなか与えず、かつ新たな発想を開発させなかったのである。

2000年に入ってFFR(FRANCEラグビー連盟：国内ラグビーの普及・運営・統括団体) が委員会を設立してこの課題に取り組み、その厚い壁を切り崩そうと努力を重ねてきた。2008年になり政府までが乗り出して**”Rugby a 5”**の規律と原則を確立した (*20 。これはスポーツとして最近では成人病の一次的な予防策としても重視されてきており**《健康的でフレンドリーで楽しい。激しいタックルもスクラムもない、両手タッチだけを軸とするソフトなレジャーラグビー》である** (*7,20 。

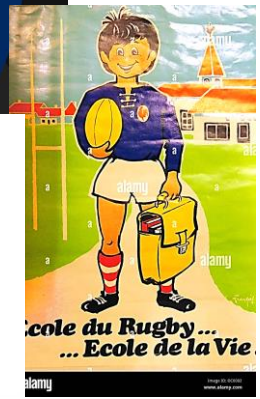
■であるならば、これは現在盛んに行われている【7人制ラグビー】の事前に学校体育や社会レクリエーションに最優先で取り入れるための『**レジャーラグビー**』として見るべきものであろう。

RUGBY CLUB ROMANAIS PEAGEOIS
の5人制 (両手) ラグビー大会ポスター

8　結 論

ラグビー教育に関わる信念と出発点が違う。

これに勝てるか、そしてできるか、日本!!



■**FFR (FRANCEラグビー連盟)** 直轄による全国統一のラグビースクール プログラム =**EDR** (Education de Rugby) がある。

右の各画像は、各地のスクール生募集と目印のポスターである。

■そこにいわく**【ラグビースクール、それは人生の学校！】**。

《ECOLE DE RUGBY, ECOLE DE LA VIE !》ラグビーに対してこれほど愛着と自信を持った熱いスローガンがあるだろうか。これほど子どもたちにわかりやすく、かつ強力なスローガンがあるだろうか。いずれの実例も、今回のOccitanie地域圏からは遠く離れており立派なプロチームを持たない地方のアマチュアクラブでの営みである。はたして我々は近い将来、これほど端的なスローガンを保護者と子どもたちに向かって発信できるのだだろうか（* 7。

■このスローガンは先述したFFR(全仏ラグビー連盟)の熱心な普及活動によるものである。

ラクビーの教育に関与する者は、他のスポーツ種目に対する潜在的な劣等感や気負いがあり、他の人気スポーツ種目やTV放映のパワーに圧倒され遠慮がちになっていることはないだろうか。ラグビーが声をあげれば『それならわが種目が一番だ』と反撃されることをおそれているのか。

■今回の探求ではFRANCEラグビーの心臓部といえる **Occitanie地域圏**をめぐり文化地理的に多角的なアプローチを試みた。そのなかで今大会のテーマである「ラグビー競技の学校教育における課題と展望」という観点から見れば、**日本の学校教育のなかでは(日本ラグビー協会が主導する形によっては) まだまだ進化も進歩もみられていない。アプローチも、インパクトも、さらには社会に対する訴求意欲も低い。**若干「7人制」や「タグラグビー」が課外活動でのラグビー同好会やラグビースクールのための教材のように紹介されてきているのみである。

■日本においてラグビーは事実上、ごく少数のクラブをのぞき「良い体育教材のひとつ」として大切にされてはきたものの (*9、FRANCEのようにすべてのラグビークラブやスクールが**【ラグビーとは人生だ !】という迫力ある哲学・信念と熱意をもって「心に響くアプローチ」を仕掛けるような説得力や意欲的な提案はなかった。**学校体育での実施率も低いままであった。

■元来、ラグビーはその特色と価値を維持してきた独特の魅力を放つ「文化資産」である。
■ラグビーの特性は子どもたちに対して たくましい 「心身能力」「忍耐力」は無論「社会生活力」（=社会性）「人間総合力」「問題解決能力」さらに「目的集約性（団結力）」「協調性」「勇気と友情」「尊敬力」「規律」「安全管理力」、そして「規律」と「感情のコントロール力」を与えることができ、育て続けることができる (* 6 。ラグビーとは すなわち【人格陶冶価値】また 【教育的価値】の極めて高いスポーツである。ラグビーは価値の高い【社会教育文化資産】とも呼べるものである。
■日本政府は第二次大戦の終戦直後から教育行政において、このラグビーを学習指導要領で高校の集団競技(ゴール)型の体育教材=球技(スポーツⅡ系)として採用し続けてきた(一部短い空白期間はあったが)。これは、我が国の教育史においても特筆すべき実例である。さらに2017年からは「タグラグビー」もこれに加わり、同じく小学校・中学校の学習指導要領に採用されている (*9 。
■ラグビーはその指導要領においても、子どもたちの育成と市民生活に関して確実な立ち位置を確保してきた。すなわち、我が日本独自の伝統を誇る特徴優れた武術系(武道)スポーツ = スポーツⅢ系の数々(柔道・剣道・薙刀道・空手道・合気道・少林寺拳法など個人が対峙・対決する形のスポーツ)とは異なり、その反対正面にポジションを置き、«高い烈度で集団で対峙・対決する**球技、ティームスポーツ = スポーツⅡ系» として自ら独特のポジション(特色と地位)を保持している** (*9。

Ⅱ系、Ⅲ系ともに烈度の高いスポーツではあるが、なかでもサッカーやハンドボールなどのゴール型競技の中で、対峙するふたつのチームのプレー展開の中の身体接触と構造がそのポジションや攻守入れ替わりも含めて複雑で難度が高いものがラグビーである。

■日本国内ではラグビー関係者とその教育的な配慮の取り組みは、誠実で一生懸命ではあるが、「燃え続ける」FRANCEとは対照的に、**世間ではいまだに「ごく一握りのラグビー愛好者による単なる縮み志向&排他的なスポーツの営み」という印象でしか感じ取られていない。**つまり地域密着の生活文化的な「必要・必然」たる熱い前提を持つラグビー教育の取り組みからは程遠い。

■また、日本国内のラグビー実践においては、指導者・保護者・選手の三者がいまだに「ラグビーは苛烈にして勇敢な男子的闘いなり」という固着した観念をともに強く保持し続けており、スポーツとしての進歩・進化に必要な《許しと包容力》に欠けている。おりから、2020年より全国中学校においては文科省や各都道府県教委などの先導等により**「校内のスポーツ同好会に対する外部講師招へいの許容、ないしは勧め」なる取り組みが普及・実践されつつある。**

これは、好機到来とみるべきである。

地域スポーツクラブやスクールの指導者が、学校教育の一端を担えるチャンスが、言い換えれば、地域と学校のダイナミックな接点が一気に増えるチャンスがやってきたとも考えられる。

■Occitanie の資料にも再三出てきたように、ラグビーは単なるスポーツに執着したり、これに甘んずるものでなく、地域の市民生活そのものの一部であり、生活と家庭教育にも根付いた文化資産である。

■ラグビー教育の原点とは何か。それは「ラグビーとは貴重な文化資産・教育資産としてのスポーツ教材だ」というゆるぎない哲学と信念である。その愛情・熱意にくわえて指導者たちが「ラグビー哲学」について鋼鉄の決意と意思を持ってこそより良質のラグビー教育が成立する。その結果子どもたちはケガ(スポーツ傷害)から守られ、勇気と希望と喜びをもって、地域や家族もろともラグビーを楽しみながらたくましく、また助け合い・支えあいながら育ってゆくことができる。これを今回 Occitanieのラグビーから学んだ。**そこにはもはや、ラグビー実践を怖れたり回避するような理由はいっさいない。**

■ならばいかに接するべきか。手順は異なるだろうが、FRANCE Occitanieにヒントを得た名案がある。

1) 怖さがなく特殊な器具や煩わしさもなく、平服で5~10分間楽しめる**【5人制ラグビー】**を地域の体育祭や、お祭りイベントなどに持ち込む。**「今日はお祭りでチョコっとラクビーやってきます!」**＝小学生・中学生から祖父母・父母・青年団までソフトに誘い、愉快に大騒ぎして楽しんでいただく。

2) 同時に校区となっている**小・中・高校の体育授業でも5人制ラグビーを期間限定で楽しませる。**体育科としては、ルール・チーム作り・プレーの作戦についての「教科テスト」も真摯に設ける。

3) 地域クラブ(OO商店/公民館などが本拠地)を発足させ、同時に別に **有志指導者のいる中学・高校に「同好会」や「合同チーム」を共同設置する。**すべて合わせればそれが**【地域CLUB】**となる。

一方、現在、全国の高校のラグビークラブを中心に「限界クラブ」(部員1名~5名という惨状)という これまでにない不遇にして困窮な時代を迎えることとなっている。これに応ずるために究極の選択とも言える複数校による【合同チーム】が結成・登場してきた。これは逆転発想からすれば、『地域ラグビークラブ発生』に向けた劇的なパラダイムシフトだとも理解・認識できる。

提案：【日本ラグビーの普及拡大のための構造構築の新たなトライアル構図】

日本ラグビー協会 ＆ 地域ラグビー協会

統括・研修・指導・情報提供・活動支援・調査研究・交流仲介・大会開催

プロリーグチーム

事業団やセミプロチーム・　社会人(学校以外の)のクラブ・　地域ラグビークラブ

ラグビースクール (地域協会に登録)

(地域協会に登録して定期 / 不定期に活動中)

小学校同好会活動・ 中学校同好会活動・高等学校部活動等・大学体育会活動等

新たな支援パワー＝ 地域指導者の参加 ＝ 指導支援

パラダイム
シフト

① **学校体育ラグビー**(レジャー型ラグビー 5人制)の普及と推進

負の条件 ＝社会現象＝青少年人口そのものの漸減⇒登録活動人口の漸減

★ 試合参加難渋の「限界クラブ」発生★▽

ラグビーを支える活動基盤の赤信号

② **苦肉の策だった【合同チーム結成】⇒を進化させて常設⇒【地域クラブへの昇華・包摂へ】**

■現在の体育現場では、秋や冬の季節の声を聞けばすぐに「距離走」「持久走」が優先される。子どもたちは体育授業の毎時間1 ~ 2kmを問答無用で「マラソン大会準備」と称して単調な運動に駆り出され、走らされる。その時間を忌避して「見学扱い」を選ぶ生徒もなくならない。

■同じ走るのならば、タックルの心配など危険性のないダイナミックな【5人制ラグビー】を思い切り楽しめばどうか(そのように取り組んでいる学校教育現場も日本国内にはある)。(*20

■そこでは激しいスクラムやラック、体当たり、タックルや転倒・擦り傷などの心配は不要。安心できるルールのもと、子どもたち自身がアイデアを出し合って作戦を練り、対抗戦ごとにメンバーの組み立てを考え、男女のハンディキャップも乗り越えてゆく。例えば、男女複数クラスの合併授業として2時限 (休憩含む) 通し授業とするなど季節の体育の愉しみとして学校を挙げて展開され、運動会や体育祭での発表につなげてゆくことも想定できる。わざわざ「タグ」等の用具を準備する必要もない。**その実践のアイデアは尽きない。**

ラグビーは授業展開や単元消化のためだけの教材としての存在ではなく、かつ遊びとは異なる。

ラグビーは許しと包容力とやりがい豊かな優れた学校体育の一部でありたい。

その取り組みの中で子どもたちのラグビーはさらに進化成長をとげ、望みがふくらんで『クラブづくり』などのステップへと続く成果を積み上げることも可能である。

今回の調査と探求の中で、Occitanieラグビーは「感動的な高度文化民力」の見本であることが判明した。さっそくではあるが我々にとっては、小学生から中学・高校生・大学生まで、そして社会人市民までが安心して参加でき楽しめる…そんな授業が待たれ、イベントが待たれている。

【安心で楽しくやりがいも大きく皆で毎年続けたいボールゲーム ⇒その中で人間力も育つ!!】

これこそ理想の方針であり、次代の活きた学校体育・社会体育のラグビーではないだろうか。

ラグビー文化の幸せをもっと我らのものに！ 我々の生活と人生のまん中に！

Occitanieラグビーは「感動的な高度文化民力」の見本である。

困難に対して勇敢に立ち向かい、励ましあい、支えあえる【地域の総合人生力】を

ラグビー文化の幸せをもっと我らのものに!! 我々の生活と人生のまん中に！

FRANCEでは、やはり**Occitanie** を含む南部が中心地となって、**5人制ラグビー**（FRANCE語ではRugby a 5 〈リュグビ・ア・サンク〉、または Touche Rugby〈トゥシュ・リュグビ〉と呼ぶ) の普及が加速している。**まさに老若男女混合チームによる「レジャーラグビー」Rugby Loisir〈リュグビ・ロワジール〉である。**選手たちは仕事や学校帰りに集まって、楽しく過ごせる時間と環境を作っている。この5人制のレジャーラグビーにはスクラムやタックルがなく、両手タッチあるのみ。ラックも禁止。だからこそケガなどの心配がなく初心者や高齢者も楽しむことができて皆の笑いが止まらない。、Rugby a 5 はリラックスしたラグビーの別の形であり、愛すべき市民スポーツなのである (* 5,6,20。もちろんFRANCEの学校体育の時間でも大いに取り入れられている。地域の学年別大会も盛んである。

ぜひ、日本全国で学校体育の段階からこのような楽しいレジャーラグビー活動を我々の生活のまん中に入れて幅広く、市民も巻き込んで生きがいづくり、人づくりと条件整備(地域クラブづくり)を、地域ぐるみで進めてゆきたいものである。**ラグビーの幸せを広げるために。**

困難に対して勇敢に立ち向かい、励ましあい、支えあえる【地域の総合人生力】をラグビーで構築しよう。

Montpellier ”Midi Libre” 紙より転載

本文以上

★ 引用・参照・転載文献一覧 ★

*1 NHKニュース(2023年5月7日 18時30分、12日01時39分) 2023

*2 France Diplomatie (Le ministère de l'Europe et des Affaires étrangères HP)

"Le rugby" d'exposition par muse national du SPORT . 2024

*3 文化庁HP、及び山碕敦司「ラグビー人類学」試論2019より引用・加筆

*4 Wikipedia "France national rugby union team" Feb.2024(English)

*5 FFR EDR texte " LIVRET ECOL'OVAL " 2020.09.14

*6 FFR " Ecol'Ovale ou le rugby a l'ecole " 2020.09.14

*7 Amical Club de Soissons (Créateur d'avenir depuis 1923) HP 2024

*8 World Rugby "World ranking" March 2024 HP

*9 高等学校学習指導要領（平成30年告示）体育編解説 (317pなど) 2018

*10 「オクシタニーとは何か」筑波大学人間総合科学研究科(元)　金子明日香 2002 (73pなど)

*11 Toute Europe HP "Occitanie" 2024

*12 WikipediA France HP “Catharisme” 2024

*13 “Lexique sur le Rugby en languedocien” CALAMEO HP 2024

*14 Dossier de Presse de Occtanie « Occitanie, terre de rugby » (オクシタニはラグビーの大地) 2022
行政府観光局 公式記者発表資料

*15 Histoire “Rugby : du combat celte au jeu occitan” Jean Lacture 1979

*16 Rugby Club Du Levant (FFR) 入会案内書 5p

*17 時事通信社「時事通信ニュース: スポーツ」 2023.09.23 付け記事

*18 Tourisme Londes HP “la chapelle Notre Dame du Rugby” 2024

*19 「女子大学生の教材としてのラグビーの価値」中川昭ほか(筑波大学) 筑波大学体育科学系紀要 2000

*20 FFR HP “ Rugby a 5 “ 2024

*21 WikipediA FRANCE “Harpatum” 2024

*22 WikipediA FRANCE “Soule” 2024

*23　「FRANCEラグビーのプロ化過程と三つの主要エージェント」中京大学体育学部 (元)客員教授
クロード・ベルナール 2007

*24 WikipediA FRANCE “Championnat de France de rugby à XV ” 2024

*25 WikipediA FRANCE “Equip de France de Rugby a 15 ” 2024

*26 L’Equipe “LE 15 DE FRANCE, L’EQUIPE DE TOUTE LA FRANCE ? ” 2023

*27 WikipediA FR. “Midi Olympique” 2024

*28 France Blue HP “ ici ” 2024

*29 Sud Ouest HP “La phrase de Jean-Pierre Rives ” 2023

★今回の調査探求の項目整備については、Google AIの **”GEMINI”** から貴重なヒントと助言を得た。新鮮な驚きを得るとともに感謝に耐えない。　ただし内容詳細の執筆および資料の検索・引用・転載は AI **“GEMINI”**の助力・支援を得ることなく100% 本研究発表者自身が責任をもって実施したことを申し添える。